

第9回ノーバディズ・パーフェクト・プログラム総括

植田 智¹⁾

1. はじめに

本学においてノーバディズ・パーフェクトプログラム（以下、NPプログラムと略）を開催して、今年度で9回目となった。心理学科のソシオ学校活動として地域にも定着し、プログラム参加者と本学の他の子育て支援活動とのつながりも深まってきた。

安佐北区との共同開催も2年目となり、連携もさらにスムーズに行われるようになった。また、例年通り財団法人ひろしまこども夢財団よりこの活動の趣旨にご賛同いただきご後援をいただくことができた。

一方、今回は毎年託児スタッフとしてお世話になっていた子育て支援グループ「MaMaほっけ」の方々が都合により参加できなくなったため、新たに海田子育て支援サークル「くすくす」の方々にご協力を依頼することとなった。

2. NPプログラムについて

NPプログラムについての解説は2010年度の本紀要（植田，2011）を参照されたい。概略として、このプログラムはその名の通り「はじめから一人前の親などいない。皆まわりからの助けを得ながら親になっていく」との考えのもとに、カナダで作成された0歳から5歳の乳幼児を持つ母親向けの支援プログラムであり、毎週1回の計8回で構成される。事前面談をもとに設定された共通の悩みや不安などのテーマについて、ファシリテーターの支援のもと、参加者同士で不安の軽減や問題解決の糸口を見つけるとともに、関係づくりをめざすものである。

そのことを可能にするために重要となるのが、完全クローズドの安心してくつろげる空間づくり

と、そのためのファシリテーター、託児スタッフ、運営スタッフの3部署の連携である。本学では、毎回プログラム終了後に全スタッフによるミーティングを行うことで、連携を密にしていることがひとつの大きな特色となっている。

3. 実施概要

- (1) 主 催：安佐北区・広島文教女子大学人間科学部心理学科・心理教育相談センター
- (2) 後 援：財団法人ひろしまこども夢財団
- (3) 開催日：2015年10月7日～11月25日の毎週水曜日10:00～12:00まで、全8回
- (4) 場 所：広島文教女子大学心理教育相談センター
- (5) 参加者：13名（0～5歳の子どもを持つ母親）、子ども13名（0歳3カ月～3歳4カ月）
- (6) スタッフ（敬称略）

ファシリテーター：金子留里，濱田さつき，2名
いずれもNPジャパン認定ファシリテーター

託児スタッフ：森本伸子（代表），和田宏子，山口知美，加茂美由紀，迫田幹子，原麻里，瀧川有希子，長迫紀子（以上，海田子育て支援サークル「くすくす」メンバー）8名

学生託児スタッフ：伊藤春香，奥田智紗，小副川恵，宅和小春（以上，心理学科4年生），浴雅美，河村美佳，川元志織，祥雲彩加，野村恵梨花（以上，初等教育学科4年生）9名

運営スタッフ：植田 智，小早川久美子，松高由佳，兼田知美，平原明日香，5名

1) 広島文教女子大学人間科学部心理学科

4. 第9回NPプログラムの特徴

(1) 安佐北区との共催

安佐北区との共同開催は今年度で2回目となった。昨年度以上に連携が密となり、多くの対象者に周知を図ることができると同時にアウトリーチもかけやすくなったものと思われる。

(2) 心理学科「ソシオ学校」活動としてのNPプログラム

2010年度より、本プログラムは子育て支援という地域貢献と教育活動の2つが両輪となった「ソシオ学校活動」として位置づけられている。

学生たちのNPプログラムへの関与度を高めるため、募集チラシの作製や発送、参加者名簿の作成などの事務的業務を学生たちに任せた。これにより、地域貢献活動についてのノウハウやそれにかかわる人々の思いを理解することを狙っている。

さらに、NPプログラムの意義や自分たちの位置づけを明確にするために、事前講習会において託児方法のみならず、プログラムそのものについての研修も行っている。

プログラム実施中は、託児による子どもの発達やかかわり方の体験的理解はもとより、毎回終了後のミーティングにおいてファシリテーターからプログラムの概要を報告していただくことにより、母親や子育てに対する理解も深めている。

(3) 託児スタッフの交代

先述の通り、今年度はこれまで長年協同してきた「MaMaほっけ」

のスタッフの方々が、都合により参加できなくなった。単なる託児スタッフというだけでなく、学生に対する教育的配慮もしっかり行っていただいただけに、当初、代わりとなるスタッフを探すことは容易ではないと思われた。しかし、縁あって海田子育て支援サークル「くすくす」の方々にご参加いただけることとなった。毎回、全体での共通目標を提示したり、個人ごとの目標を設定させたりするなど、学生への教育的配慮も十分行き届き、安心してお任せすることができたことは、このプログラムを成功させる上でとても大きな要素となった。

5. おわりに（謝辞）

今回も、安佐北区および財団法人ひろしまこども夢財団の皆様のおかげではない数多くのご支援、本学教職員の多大なるご協力、ファシリテーターや託児スタッフの皆様の労を厭わぬお働き、そして参加してくれた学生たちの誠実さと責任感に支えられて、大過なくプログラムを終了することができた。

ご関係の皆様方に、紙面を借りて深く感謝の意を表します。

引用文献

植田 智(2011). 第3回ノーバディズ・パーフェクトプログラム総括 広島文教女子大学臨床心理学研究, 1, 65-66.